

宇田浦の大型定置復活による宇田郷地区の活性化

株式会社宇田郷定置網 廣石 芳郎

1. 地域の概要

株式会社宇田郷定置網は、山口県漁協宇田郷支店の組合員である。宇田郷支店は、日本海側の阿武町にあり、その地区は、支店事務所のある宇田浦地区と、その北側の尾無浦地区の大きく2つに分けられる。(図1)



図1 宇田郷支店の位置図

2. 漁業の概要

支店の主な漁業は、定置、つり、採介藻等であり、平成29年度の正組合員数は46人、水揚げ額はおよそ1億6,000万円である。

3. 研究・実践活動の取組課題選定の動機

かつては、宇田浦地先に1ヶ統、尾無浦地先に1ヶ統の大型定置網が設置され、それぞれ、地先の大敷組合により操業されていた。宇田浦の方は、主に秋から冬に南下するブリやサワラなどを対象とした冬網、尾無浦の方は、主に春から夏に北上するアジやイカなどを対象とした夏網で、同じ大型定置でも、主な漁期や対象魚種が異なった。

これらの大型定置は、台風による被害や漁具の老朽化などの問題で、平成16年ごろにいずれも休止、両大敷組合は解散した。尾無浦の方は、平成18年に大敷組合が再結成され、大型定置は何とか復活したが、宇田浦の方は休止の状態が続いた。

私は、再結成された尾無浦の大敷組合の代表を務めるとともに、漁労長として漁業操業に従事してきた。しかし、尾無浦の大型定置は、復活は果たしたものの、水揚げの減少、漁船・漁労設備などの老朽化に伴う維持管理コストの増大、乗組員の高齢化に伴う労働力不足などの問題で、事業の継続が年々難しくなった。また、水揚げについては、尾無浦は夏網であり、秋から冬の水揚げはあまり期待できないという、根本的な問題を抱えていた。

一方、宇田郷地区については、近年、過疎化が進行しており、この対策が求められていた。宇田郷地区は、昔から漁業を中心とした地域であり、漁業の衰退が過疎化の進行を招いた一因であったため、私は、大型定置事業の拡大・継続を図ることで、過疎化に

何とか歯止めを掛け、昔のように活気ある地区に近づけたいと考えるようになった。

それには、休止状態の宇田浦の大型定置を復活させ、尾無浦と合わせた2ヶ統操業を実現させるしかなかった。これが実現すれば、漁場の拡大により水揚げの増大が見込め、また、夏網と冬網の操業ができるため、1年を通じて水揚げが安定する。現状の老朽化した漁船等では2ヶ統操業は困難であるが、これらを最新のものにできれば、2ヶ統操業が可能となるだけでなく、維持管理をはじめとした運転コストを軽減することができる。水揚げの増大・安定と運転コストの軽減ができれば、大型定置事業の経営は向上・安定し、乗組員を継続的に雇用することが可能になる。そして、乗組員とその家族が宇田郷地区に居住してくれれば、地区の過疎化に一定の歯止めを掛けることができ、地区の活性化を図ることができる。私は、2ヶ統操業の実現に向け取り組むことにした。

4. 研究・実践活動の状況及び成果

(1) 研究・実践活動の状況

2ヶ統操業の実現には、最新の漁船等の取得をはじめとした多くの課題があった。このため、漁協主導により、平成27年1月に、漁協、大学、行政、企業その他水産関係機関で構成された協議会が立ち上げられ、協議会において課題を解決するための取組が検討された。もちろん、私も協議会のメンバーとして検討に加わった。そして、漁船等の取得については、国事業の利用を考えると、その他の取組と併せて何度も検討を重ねた結果、およそ1年間で取組計画の取りまとめに至った。この計画を国に提出したところ、平成28年3月に計画は認定され、国事業による漁船等の取得が可能になった。この認定後に、計画したととも多くの取組が実行され、2ヶ統操業の実現に至った。私は、取組計画の検討から2ヶ統操業実現までの間に、主として次の4つのことに取り組んだ。

① 漁船の設計・建造に係る造船所との打ち合わせ等

漁船については、漁労設備を含め、取組計画時にある程度の設計をしておく必要があった。このため、専門の業者等の意見を聞くとともに、造船所に何度も足を運んで打ち合わせ等した。設計に当たっては、1隻で確実かつ長期的に2ヶ統操業できる、ということ強く意識し、船の形状や、ネットホーラー等の漁労設備には徹底的にこだわった。また、省人、省力、省エネについて十分考慮するとともに、乗組員の安全面や快適性にも十分に配慮した。建造時には、造船所との詳細な打ち合わせを何度も行い、工事着手後は、頻りに造船所に出向き、建造状況の確認等を行った。そして、漁船は、平成28年10月に計画どおりに竣工した。

② 大敷組合の株式会社化と積極的な株主募集活動

大敷組合では、基盤が弱く、責任関係も明確ではないため、これを株式会社化することにした。このため、株式会社について学びつつ、関係者への説明、協力依頼、専門家

への相談等を継続的に行った。その結果、現在の株式会社宇田郷定置網が誕生し、私が、この会社の初代社長に就任した。しかし、設立当初は、株主が9人しかおらず、出資額が少なかったため、これを増やすべく、宇田郷地区の組合員を対象に、会社の取組の意義を説明しながら、積極的な株主募集活動を行った。そのかいあって、株主は40人に増え、その分、出資金も増えた。そして、責任が明確となり、しっかりとした組織になると同時に、宇田郷地区の大勢の人に支えられた地区の会社になることができた。

③ 冷却効果が高い氷の確保

2ヶ統操業により漁獲物が増えると氷が不足するため、不足分を確保する必要があった。同じ氷を使う手もあったが、今後の魚価の維持・向上を考えた場合、漁獲物の鮮度保持を徹底する必要があったため、より冷却効果の高い氷を使用することにした。しかし、氷の種類はたくさんあり、どの氷の冷却効果が高いのか分からなかったため、情報収集するとともに、実際に魚を使って冷却試験を行った。(図2)



図2 冷却試験

その結果、シャーベット状で漁獲物に密着するタイプのスラリーアイスの冷却効果が高く、また、製造コストも低く抑えられることが分かり、スラリーアイス製氷機を整備することになった。

④ 乗組員の確保

不足する乗組員を確保するため、ハローワークへの募集、漁業就業者支援フェアへの出展等を積極的に行った。そして、就業を希望した人に、随時、個別面談や体験乗船などしたところ、必要な乗組員を確保することができた。(図3)



図3 体験乗船

(2) 研究・実践活動の成果

漁船は、平成28年10月に竣工した。船名は第十八おなし丸、トン数は18トン。宇田郷地区では、久しぶりの新船の竣工で、竣工式を開催したところ、大勢の方々に祝っていただいた。年配の方の中には、久しぶりに宇田郷がにぎわったと、感動される方もおられた。(図4)



図4 新船の竣工式

そして、必要な乗組員を確保し、操業体制が整った翌11月から新船による操業を開始した。私は、漁労長として操業に従事した。始めのうちは、新船に慣れていないこともあり、揚網等

に手間取ったものの、サワラを中心とした好漁もあり、2ヶ統操業に手応えを感じることができた。その後、徐々に作業に慣れ、現在では、新船1隻だけで、技術的には問題なく周年2ヶ統操業ができています。

漁獲物は、スラリーアイスを使用して魚艙中で冷却しているが、この氷の冷却効果は抜群である。加えて、操舵室で魚艙内の温度を確認できるため、帰港まで魚艙内の温度をこまめに確認し、温度が高くなれば氷を追加して温度を下げる等しており、漁獲物の鮮度保持はしっかりできている。周囲の評判は良く、こうした鮮度の良い漁獲物の一部は、支店の協力により、道の駅阿武町などで販売されている。(図5)

この販売については、魚を買うのに不自由している地域の住民をはじめ多くの人に喜ばれている。



図5 道の駅阿武町

今日では、操業から漁獲物の鮮度保持、出荷までの一連の作業をスムーズに行うことができている。操業は、新たに4人が加わった14人で行っているが、若い者の加入で乗組員の年齢的なバランスが良くなった。チームワークも良く、皆、いきいきと仕事をしている。

私は、宇田浦の大型定置復活による宇田郷地区の活性化のため、休止状態の宇田浦の大型定置を復活させ、尾無浦と合わせた2ヶ統操業を実現させることで、この大きな目的を達成することにした。漁協等の力強い支援もあり2ヶ統操業は実現した。その後およそ2年が経過したが、水揚げは計画を上回っており順調、一定のコスト縮減も実現でき、大型定置事業の経営の向上・安定に目途が立った。また、新たに加入した4人の乗組員とその家族が宇田郷地区に居住してくれたため、地区の過疎化に少しは歯止めを掛けることができたのではないかと考えている。こうしたことから、私としては、ある程度目的は達成できたと感じている。

5. 波及効果

県内には、夏網と冬網を組み合わせた大型定置漁業の2ヶ統操業の実態はないものと思われる。このため、水揚げ等が今後も順調に推移すれば、本事例が、当該2ヶ統操業を目指す者の良い手本になるものと考えている。

6. 今後の課題や計画と問題点

定置漁業は待ちの漁業であり、自らの力で漁獲量の増大を図るのは困難である。一方、漁獲物の品質は良好であるため、今後はこの品質の良さを積極的にアピールすること等により、単価の向上を図り、大型定置事業の経営のさらなる向上・安定に努めたい。これが乗組員の安定雇用につながり、地区の発展につながると考えている。